

世界史の中に日本史を位置づける歴史学習 —世界史 A における日本史学習の指導法について—

奈須 恵子

はじめに

2009年3月に告示された現行の高等学校学習指導要領において、高等学校地理歴史科の世界史 A と B では、世界の歴史を日本の歴史と関連付けること、日本史 A と B では日本の歴史を世界の歴史と関連付けることが、その目標の中で示されている。世界史 A の「内容」では、「(1) 世界史へのいざない」において「日本の歴史と世界の歴史のつながりにかかわる適切な主題を設定し考察する活動」を行うこと、「(2) 世界の一体化と日本」と「(3) 地球社会と日本」においては「世界の動向と日本とのかかわりに着目させる」ことが明示されている¹⁾。

「日本史と世界史の統一的把握」が歴史教育者や歴史学研究者に課題として意識され始めたのは、戦後、高校社会科の1科目として世界史が設置されて程ない1950年代前半からだったと考えられ²⁾、現在に至るまでその実践上・研究上の模索は続いている。日本史の世界史的理解のための実践的ヒントの蓄積も存在し³⁾、近年では、日中韓3国共同歴史編纂委員会によって、東アジア近現代史の変化を世界史の流れと関連させることをめざした、東アジア近現代史の歴史書が刊行されている⁴⁾。こうした戦後の歴史教育の歴史についての具体的な検討はまた別途行うこととしたいが、本稿では、現在の世界史の授業の中で日本史を位置づける歴史学習の可能性をさぐるとい

う課題に焦点をしぼる。

2009年告示の高等学校学習指導要領に基づいて検定を受けた世界史 A の教科書で、2014年度現在使用のものは【表1】の9種である。各教科書とも日本史に関わる題材・事項を大なり小なり組み込んでいることは確かであるが、世界史と日本史の内容がやや別立ての構成になっているものもあれば、世界史と日本史のつながりを意識させることに力点の置かれているものもある。しかし、いずれの教科書を使用教科書とする場合であっても、教員は、教科書自体に示されているトピックや小コラムを活用したり、他の事例を補いつつ授業を展開することは可能であろう。標準2単位というかなり限られた時間数の授業とはなるが、世界史と日本史のつながりを生徒が実感・納得できる形で内容を提示し、世界とつながる日本という視点を生徒が持つことを可能にする学習を促すことが世界史 A の授業では求められているといえよう。

以下、本稿では現行の世界史 A 教科書も参考にしつつ、歴史学習において世界とつながる日本という視点を具体化するためのポイントや授業上の工夫を考察していく。なお【表1】に掲げた教科書に言及・引用する場合は、教科書発行者の略称を用いて帝国 p.○○などと記載する。2種発行の実教出版と3種発行の山川出版社については山川 1 p.△△などの形で表記する。

【表1】2014年度使用の高等学校地理歴史科「世界史A」教科書一覧

○東京書籍『世界史A』（世A301）⇒本稿では東書と略す。 （加藤晴康ほか10名。2014年2月10日発行・2012年3月27日検定済）
○実教出版『世界史A』（世A302）⇒本稿では実教1と略す。 （平田雅博・飯島渉ほか9名。2014年1月25日発行・2012年3月27日検定済）
○実教出版：『新版世界史A』（世A303）⇒本稿では実教2と略す。 （木畑洋一ほか7名。2014年1月25日発行・2012年3月27日検定済）
○清水書院『高等学校 世界史A 最新版』（世A304）⇒本稿では清水と略す （上田信・大久保桂子・設楽國廣・原田智仁・山口昭彦ほか6名。 2014年2月15日第二版発行・2012年3月27日検定済）
○帝国書院『明解 世界史A』（世A305）⇒本稿では帝国と略す。 （岡崎勝世ほか7名。2014年1月20日発行・2012年3月27日検定済）
○山川出版社『要説世界史』（世A306）⇒本稿では山川1と略す。 （木村靖二・佐藤次高・岸本美緒ほか5名。2014年3月5日発行・2012年3月27日検定済）
○山川出版社『現代の世界史』（世A307）⇒本稿では山川2と略す。 （近藤和彦・佐藤次高・岸本美緒・中野隆生・林佳世子ほか2名。 2014年3月5日発行・2012年3月27日検定済）
○山川出版社『世界の歴史』（世A308）⇒本稿では山川3と略す。 （近藤和彦・羽田正ほか9名。2014年3月5日発行・2012年3月27日検定済）
○第一学習社『高等学校 世界史A』（世A309）⇒本稿では第一と略す。 （曾田三郎ほか11名。2014年2月10日発行・2012年3月27日検定済）

※書名の次に付した（世A301）などは、当該教科書の記号・番号である。

1. 日本史の出来事を別立てにしない単元構成の工夫

現行の世界史A教科書では、「世界の動向と日本とのかかわりに着目させる」という大前提のもとに、日本史教科書でもとりあげられる日本史上の出来事・動向を、教科書中に組み込むことでは共通している。幕末から明治維新を経て日清戦争頃まで、日露戦争と韓国併合、第二次世界大戦における太平洋戦争（アジア太平洋

戦争）は、記述の分量の多寡はあるが9種いずれの教科書でも節あるいは小見出しレベルで登場している⁵⁾。

しかし、これらの出来事・動向のとりあげ方を見ると、世界の動向をとりあげた後に別立ての節あるいは小見出しレベルで置く構成をとっている教科書も少なからず見られる。このように別立て、くくりだして置く構成では、通常の日本史教科書で扱う内容を簡略化してそのまま

埋め込むことになり、これらの出来事・動向をほぼ同時代の世界の出来事・動向と並べることはなっても、その関わりの内実に踏み込む記述には乏しくなってしまう。

他方、節や小見出しで別立てで扱うと同時に、世界の動向をとりあげる本文の説明においても日本を組み込み、日本の動向に言及するスタイルをとる教科書も存在する。特に山川3の第Ⅱ部第2章「帝国主義時代」と第3章「二つの世界大戦」では、このスタイルが顕著である。例えば、第2章「帝国主義時代」では、章冒頭の37節「世界分割と一体化の進展」において、列強の領土分割的になった中国の動向を扱い、日清戦争と日本による台湾の植民地化に言及して、ドイツ・ロシア・フランス・イギリス・日本が「中国国内に自己の勢力圏を設け、鉄道の敷設や鉱山採掘の利権、関税特権などをえた」（山川3 p.123）と説明する。そして38節「帝国主義の国際対立」において「欧米や日本が植民地を獲得し、勢力圏を拡大しようとする際には武力がもちいられ、19世紀末から20世紀初頭にかけて、清仏戦争・日清戦争・アメリカ＝スペイン戦争・南アフリカ戦争などがあいついでおこった」（山川3 p.124）と世界の動向の中に日清戦争も位置づけている。このように帝国主義時代の列強の競争について、日本をその世界における全体の流れの中に組み込む説明をすることによって、世界の動向と日本の動向の関係がより明らかになることは確かであろう。

日本が起こした出来事や日本が深く関わる出来事・動向を別立てして見ていくことも、例えば日露戦争、韓国併合、三・一独立運動、五・四運動、アジア太平洋戦争では必要になるが、

やはりこれらの出来事も世界の動向の中に位置づけ、世界の動向との関わりを生徒が意識できる説明をしておくことが必要になると考えられる。そのためには、実際の授業を行う際の単元構成において、日本史事項を別立てで扱って終わりにしないような工夫が必要となり、別立てにしている教科書を使用する場合には、世界の動向の説明に補足する形でも日本史事項を組み込むように、教員が意識しておくことが大切になるであろう。

日本の関わりを意識させる視点は、アジア太平洋戦争後の朝鮮半島や台湾の歴史を理解する上でも不可欠となる。清水の第3編第6章2節5項「東アジアの諸課題」の冒頭に見られるように、「東アジアの安定を考えるときには、朝鮮半島と台湾の歴史を理解する必要がある。1945年まで日本の植民地であった両地域では、日本の敗戦のあと、住民が政治的な仕組みをつくり上げようとしたが、安定した国が形成される前に冷戦という国際環境にまき込まれ、課題を残すこととなった」（清水 p.202）という指摘をしておくことは、戦後の朝鮮半島や台湾の歴史と日本（の植民地支配）が無関係ではないことを知る上で、短いが大切な言及である。

また、各教科書では、一つの「モノ」や「事柄」に着目してテーマを設定し時代横断的に概観するといった学習のページを設定しており、「銀」「木綿」「鉄道」「女性参政権運動」などは複数の教科書で取り上げられたテーマである。「銀」では、ほぼすべての教科書で石見銀山をクローズアップしており（山川2を除く）、日本の銀が大航海時代の世界とどのように結びつき、どのように世界の動きに影響を与え、影響を受け

たのかに着目させる内容が提示されているが、これらテーマ設定のもとで、日本の動きには言及されていない場合も少なくない。

例えば、「女性参政権運動」では、フランス革命での女性参政権運動に始まり欧米の女性参政権運動の歴史は取り上げつつも、一覧表では参政権獲得の年代しかあげられておらず、日本についてはその1945年という獲得年だけを示すものが多い。他方、東書では「世界史のまど女性解放」という1ページで、グージュ、メアリ・ウルストンクラフトらの女性解放の先駆者とその後の女性参政権運動の展開、さらに平塚らいてう、市川房枝を中心とした日本での女性参政権運動の展開、朝鮮の三・一独立運動の中で女性解放が論じられたこと、また中国において五・四運動後の民族運動の高まりの中で男女同権の動きが強まったことにも言及しており、このテーマについての欧米と日本を含めた東アジアの動向をつなぐ見方が提示されている(東書 p.142)。このようにテーマ学習でも、日本史と世界史のつながりを具体化する形での学習を、教員がアドバイスすることが肝要であろう。

2. 世界史の出来事と日本史の出来事の連動を知る

上記1. で指摘したように、世界の動向をとりあげる際に日本を組み込んだ言及をすることは、世界とつながる日本という視点を得るために重要である。例えば、山川3では「幕末の世界史」という見出しで「幕末から明治国家の建設へと急展開するころの世界史を見渡すと、アヘン戦争・クリミア戦争・南北戦争・ドイツ＝フランス戦争といった重要な戦争と前後して

各国の近代化が続いている。日本の明治維新は、これらと同時代のことであった」(山川3 pp.106-107)と、世界史と日本史の大きな出来事をつなげて見る注意喚起がなされている。

ただし、これをさらに具体的に見ていくポイントを授業において示していくことが、世界史の出来事と日本史の出来事の連動を知る上では不可欠になると思われる。例えば、この「幕末の世界史」に関わる範囲でいえば、日本が最初に和親条約を結んだのも修交通商条約を結んだのも米国であったが、開港後に最大の貿易相手国になったのは英国であり、この背景として、米国の対外貿易活動が南北戦争の勃発によってかなり低調になっていたということが、一般的によく指摘される場所である。ここでさらに一步踏み込んで、例えば清水のミニコラム「世界の歴史と日本 下関戦争」のように1864年の「下関を攻撃する四国連合艦隊には、イギリス艦9隻、フランス艦3隻、オランダ艦4隻が参加したが、アメリカは南北戦争中で軍艦を派遣する余裕がなかったために、雇い入れた商船に星条旗を掲げて参加した。ペリー、ハリスと日本の開国をリードしたアメリカは、このとき影が薄くなった」(清水 p.122)という具体的な言及をするならば、幕末の日本に関する影響力における米国から英国への転換が、南北戦争という米国の状況とのつながりでより明確に理解できるであろう。

また、幕末期以外においても、フェートン号事件についてのナポレオン戦争の影響は、高校の日本史教科書でも言及されることが多いが、世界史Aの授業でとりあげるならば、フランス革命からナポレオン戦争にかけてのフランス

と英国の敵対関係をおさえた上で、ナポレオンがオランダを占領したこと、そしてフランスと敵対する英国が、オランダ船拿捕のためにオランダ船を装って長崎に入ってきたことを改めてクローズアップさせたい。現行世界史 A の中には、オランダがフランス革命については「風説書」で伝えていたものの、カトリックの国である（と幕府が認識する）フランスに占領されると、日本側からオランダの貿易が打ち切りになってしまうのではないかと考え、ナポレオンのことはひた隠しにしていたこと、しかし、「何かがおかしいと考えた人々」によって漂流民への聴き取りや蘭学書から、少しずつナポレオンの情報を得たこと、を記しているものもある（第一 p.111）⁶⁾。

限りある授業時間数での取り上げ方に難しさはあるが、世界史の出来事と日本史の出来事のつながりを、－中学校までの歴史的分野での学習を踏まえた上で－世界史の出来事から日本史の出来事を照射するような仕掛けもしつつ、授業で展開できるとよいのではないだろうか。

3. “意外な”つながりを発見する題材を提示すること

あまり時間をかけなくても、世界史と日本史の出来事の連動性に生徒が目をつけるきっかけとなるポイントを紹介することは可能であろう。現行世界史 A 教科書の中にもそうしたヒントは散見されるし、教科書にやや補足することでそうしたポイントをクローズアップすることは可能になると考えられる。以下、いくつかの例を紹介したい。

①ユーラシアを結ぶ陸の道・海の道に日本列島

も組み込む

多くの教科書で、ササン朝ペルシアの水瓶・唐の鳳首瓶・奈良正倉院宝物の漆胡瓶を並べたり（山川 2 p.22、第一 p.39、実教 2 p.9）、イランで発見されたカットガラス碗と正倉院の白瑠璃碗を並べて（帝国 p.22、清水 p.37、山川 1 p.41 など）、その形状の類似性を指摘することで中国経由のササン朝ペルシアの文化の日本への伝播を取り上げる題材としている。

他方で、「ユーラシアの諸文明」の最後の章あるいは節でとりあげられる「ユーラシアの海、陸における交流の概観」⁷⁾については、日本列島が入っていないユーラシア大陸だけの地図で海・陸の交流のルートを描いたり、日本列島は描き入れられていても、ルートのつながりは描かれていない教科書が多い。しかし、遣唐使が派遣されるようになって 2,30 年後の 7 世紀半ばにササン朝ペルシアは滅亡して、現在のイランにあたる地域はイスラーム世界に組み込まれていった。このことを踏まえるならば、中国を通しての西アジアと日本のつながりは、ササン朝ペルシア時代で途切れたのではなく、その後の時代にも続いていたということは注意喚起されてよいはずである。実際に福岡市の鴻臚館の遺構からの出土品の中には、ササン朝滅亡後以降の西アジアで作られたと推定される陶器なども見られ、唐の時代の中国に限定しても、唐と日本とのつながり、唐とイスラーム世界となった後の西アジアとのつながりは指摘できるはずである。「ユーラシアの海、陸における交流の概観」では、そこに日本列島とのつながりを組み込んで、モノの往来などを例に説明するとよいのではないだろうか。

②「綿」の世界史に日本の動向も組み込む

15世紀からの琉球王国による東アジア・東南アジアをつなぐ中継貿易や、16世紀後半から17世紀前半の南蛮貿易・朱印船貿易についてはいずれの世界史A教科書でも言及がある。

他方で、江戸時代に入り、「四つの口」で幕府がモノ・人・情報をコントロールするようになって以降については、ジャガイモやサツマイモの日本への伝播などに言及する教科書は見られるものの、モノの往来についての具体的な言及は少ない。

ここで着眼したい題材が「綿」である。テーマ学習のページで取り上げることの多いテーマの一つであり、英国でのキャラコブームと英国で綿織物の国産化が可能となってインドの綿織物業が大きな打撃を受けたことへの言及が一般的だが（例えば、第一 pp.100-101「モノから学ぶ世界史 綿織物」）、綿織物と日本という視点からの言及は殆ど見られない。

例外は帝国の教科書で、まず本文において、ヨーロッパの人々のインドの綿織物との出会いと、その普及によってもたらされた英国の生活革命が産業革命の原動力になったこと、英国が綿織物の生産国・輸出国に発展することによりインドの綿織物業が衰退し英国の資本主義経済に組み込まれていったことを説明する。これに加えて「インド産綿布の広がり」の模式図ではインド・英国・日本が描かれ、英国でのキャラコ、モスリンの流行、日本でのさんとめ棧留縞、べんがら弁柄縞の流行とその名称の由来がインドの産地ないし輸出港の名にあることに言及している。さらに小コラム「世界史の中の日本 日本での木綿の普及」では、木綿が日本に伝わったのは戦国時代とい

われるが急速に普及したのは江戸時代であると述べ、棧留縞について、(鈴木)春信が描いた棧留縞の着物を着た女性の図版を掲げ、「棧留とは、江戸中期の町人の間で流行した木綿の着物のこと。当時インドの貿易港サントメ（現在のチェンナイの南の地区）から、オランダ船により長崎にもたらされたのでこの名がついた。縦縞模様でスリムに見え、いきであるため女性の人気が高く、国内でも生産されるようになった」と記している（帝国 pp.104-105「物を通して見る世界史 17～18世紀－綿－庶民の服装を変えた流行の品」）。

このように、インド産綿織物の日本への伝播と普及については、「四つの口」で交易がコントロールされるようになって以降の江戸時代における、日本と世界のつながりを具体的に示す事柄であり、高校生にとっても、世界史学習と日本史学習を踏まえた上でのやや“意外な”つながりを発見し得る好題材にできると考えられる⁸⁾。

③岩倉使節団のルートに注目する

岩倉使節団は、世界史の中の日本史を知る類出の題材であり、現行9種の教科書のうち7種でとりあげられている（東書と山川2には無い）。とりあげ方としては、小コラムで岩倉使節団が成立間もないドイツ帝国でビスマルクと会談したこと、そしてこの使節団の視察におけるドイツでのビスマルクとの出会いが、その後の日本の針路に大きな影響をもたらしたことに言及するものが多い（4種。ただし清水ではビスマルクの発言に対する木戸孝允の反応も紹介している）。また山川1の主題学習ページ「世

界と日本 3 19 世紀の世界の一体化と日本」では、使節団が世界一周したことと使節団が欧米の最先端の科学技術を生で体験したことに本文では触れて、訪問した国や地域・会見した人物・見聞したものについて生徒の作業課題として提示している（山川 1 p.151）。

他方、岩倉使節団のルートに着目して、大陸横断鉄道とスエズ運河を通ったことを指摘して、「交通革命」の文脈で紹介している教科書もある（山川 3 と第一）。例えば、山川 3 の「世界と日本 4 19 世紀なかば－幕末から明治の世界と日本」では、大陸横断鉄道とスエズ運河が 1869 年に開通し、岩倉使節団のルートと 1873 年に刊行されたジュール＝ヴェルヌの小説『80 日間世界一周』で採られたルートがほぼ同じであったことを指摘し、大陸横断鉄道とスエズ運河が世界にもたらした「交通革命」の中味を理解させる工夫がされている（山川 3 pp.106-107）。

岩倉使節団のビスマルクとの会見とそのインパクトに言及することは、その後、日本が近代国家体制を作るにあたってドイツ帝国の仕組みにかなりの影響を受けるに至るという過程を理解する上でも重要ではあるが、やや“意外な”世界史的出来事とのつながりを意識できるようにするためには、岩倉使節団の辿ったルートに注目し、使節団と「交通革命」がまさに同時代の出来事であったという事実を焦点化する授業展開ができるかといえるのではないだろうか。

4. 日本の歴史上の出来事についての海外の意見・見方について知ること

2009 年告示の学習指導要領において、世界

史 A では「近現代世界に対する多角的で柔軟な見方を養う」という「内容の取扱」のポイントが提示されている。これを具体的に実現することを考えるならば、日本史上にあらわれる出来事、とりわけ日本が海外の国や地域との関係で起こした出来事について、その海外からの意見・見方を知ることが不可欠だと考えられる。

現行の世界史 A 教科書の中にも、そうした視点からの記述を意識的に行っていると思われるものがある。例えば、山川 3 では小コラム「キーパーソン 豊臣秀吉」において「低い身分から天下人となった秀吉は、日本では人気があるが、侵略をうけた朝鮮半島では今日でもなお評判が悪い」（山川 3 p.69）と、豊臣秀吉に対する評価が大きく異なることに言及している。江戸時代に有田焼・伊万里焼がヨーロッパでもてはやされたことについては多くの現行世界史 A 教科書が取り上げているが、その有田焼・伊万里焼などが、秀吉の朝鮮侵略の際に日本に連行された朝鮮の陶工たちに由来するものであることに触れているのは第一の教科書だけである（第一 p.96）。江戸時代における有田焼・伊万里焼の輸出をとりあげる際には、それらが朝鮮の陶工たちに由来するものであること、即ち、日本には利益がもたらされる結果となり、朝鮮にとっては専門的な技能者を奪い去られる損失を意味していたことについても言及しておきたい。

20 世紀以降の日本が起こした出来事とその海外からの反応についての記述が多く見られるのは帝国の教科書である。小見出しで「日露戦争」と「日本支配下の台湾・韓国」を取り上げ、

日露戦争については、小コラム「世界史の中の日本 日本の針路とアジアの人々」で「日露戦争での日本の勝利が、列強の植民地支配下の民族運動に大きな希望と、やがて失望を与えたことを、インド独立運動の指導者ネルーは娘に」語ったとして、ネルーの『父が子に語る世界歴史』の文章を資料として挙げ、「アジア諸国の希望であった日本の近代化政策が、朝鮮・中国への侵略を進めたことへの深い失望が読み取れる」（帝国 p.139）と説明している。同じページの人物を紹介する小コラム「韓国の独立を願った安重根」では、安重根が反日義兵闘争を展開し、伊藤博文を射殺して処刑されたことを説明するとともに、「韓国では独立運動の英雄としてたたえられている」（帝国 p.139）と言及している。1919年の三・一独立運動、五・四運動をとりあげた2部1章3節「“民族自決”を求めて」の第2項「東アジアの民族運動－三・一独立運動と五・四運動－」でもページ冒頭に「二つの運動にみられる日本への感情はどうして生まれてきたのだろうか。また、それに対して日本はどのように対応したのだろうか」（帝国 p.166）という視点を提示しており、朝鮮と中国で抗日運動が起こった経緯を本文で説明するとともに、朝鮮については三・一独立運動後に従来の武力で押さえつける政治から朝鮮の人々を日本人に「同化」させる政治に、支配政策の重点を移して、「1920年代になると土地改良事業などによる米増産運動が行われたが、これは日本の米騒動（18年）に対応したものだ。米の生産高の4割以上が日本に移出され、朝鮮は“飢餓輸出”の状態となり、多くの自作農が

没落した」（帝国 p.166）という、日本の植民地支配がもたらした朝鮮社会への深刻な打撃についても説明している。さらに小コラム「未来へ活かす歴史 皇民化政策」を設けて、日中戦争が激しくなるとともに、宮城（皇居）礼拝、日本語の使用、創氏改名の強制を行う皇民化政策が行われたと説明して「朝鮮の伝統文化や生活・社会を認めず、日本人への同化を目的としたこの政策に朝鮮の人々は反発した。このことは現在の反日感情にも大きく影響している」（帝国 p.173）と記している。

帝国の教科書では、第二次世界大戦の節の締めくくりの小見出し「戦争の傷あと」で、ナチ党によるユダヤ人のホロコーストやその他の虐殺事件が戦争の産物に他ならないことを指摘した上、「日本も、日本軍の残虐行為をはじめ中国その他アジアの人々に大きな犠牲を与えた。台湾や朝鮮では多くの民衆が日本軍兵士として徴兵され、東南アジアでは大量の労働力が徴用・動員された。こうした戦争の現実には、日本とアジア諸国との関係にいまだに深い傷あとを残している。これらに対する国家賠償の問題は戦後の諸条約の締結で終結したとされたが、1990年代にはいって、個人に対する補償が問題となってきた」（帝国 p.177）と説明している。

このように、日本が起こしてきたことについて、海外でどのように捉えられているのかということに注目させ、またその未解決の問題がもたらしている現在進行形の問題についても意識させることは、世界史を学び、世界史の中で日本史をとらえる際に極めて重要なポイントになると考えられる。

おわりに－まとめにかえて－

以上、本稿では、2014 年度現在使用されている世界史 A の教科書の記述なども踏まえつつ、世界史 A で日本史に関わる学習を位置づける際に意識したいポイントや、とりあげる題材の工夫、大切にしたい視点などをあげてみた。

まず、一つの单元の中で日本史の出来事を世界史の出来事と別立てにした授業構成にするのではなく、できるだけ世界史の同時代の出来事・動向の中に日本史の出来事・動向を位置づけ、さらにその連動を具体的に理解できるような説明・言及を行うことが望ましいとの指摘を行った。また、日本史と世界史の“意外な”つながりを生徒が意識できるような題材を示すことを、現行世界史 A 教科書の題材や取り上げ方を参考にして紹介した。そして、特に日本の歴史上の出来事についての海外の意見・見方について知ることの重要性について述べた。

「はじめに」でも触れたように、東アジアの近現代史について、日中韓の共同研究による歴史書編纂・刊行も行われている。東アジアの歴史について、中国・台湾・韓国・日本などの相互の歴史についての見方を対話を通して見直していくこと、そして、特に日本が国際関係の中で行い、影響を及ぼしてきた歴史上の出来事についての海外からの見解・見方を検討することは、ますます重要かつ喫緊の課題になってきていると考えられる。他方で、本稿でとりあげたように、日本の歴史においては、アジアに限っても東南アジア、南アジア、西アジアなどとのつながりも近代以前から存在していたことは確かであり、そうした世界のつながりを意識をもって見ていくこともまた、世界史の授業の中

で可能かつ大切になると思われる。

2011 年 8 月の日本学術会議心理学・教育学委員会・史学委員会・地域研究委員会合同高校地理歴史科教育に関する分科会提言「新しい高校地理・歴史教育の創造－グローバル化に対応した時空間認識の育成－」では、現行の世界史必修のかわりに、世界史 A と日本史 A を統合した「歴史基礎」（2 単位）を新設しこれを必修とする提言を行っていることが注目されているが、この「歴史基礎」は「日本史を世界史の一部に組み込んだ真にグローバルな歴史として教える」ものとして新設する提言となっている。

「歴史基礎」が実際に実現するか否かは現時点では不明であるが、現行の高等学校世界史の学習を通して、ある程度まで「日本史を世界史の一部に組み込んだ」学習は可能であろうし、実際にそれを可能とする実践を教員が行うことは、必要であると思われる。

今後、世界史 B での日本史学習、あるいは日本史 A・B での世界史学習について検討することも課題としたい。

【註】

- 1) 文部科学省『高等学校学習指導要領』（東山書房、2009 年 9 月）p.33。
- 2) 歴史教育者協議会編『歴史教育五〇年のあゆみと課題』（未来社、1997 年）pp.80-96。
- 3) 例えば北脇洋子『日本史のなかの世界史』（三一書房、1998 年）。また、歴史教育刷新の刺激的な取り組みを展開している大阪大学歴史教育研究会による『市民のための世界史』（大阪大学出版会、2014 年）も、日本史を組み込んだ世界史となっている。

- 4) 日中韓3国共同歴史編纂委員会『新しい東アジアの近現代史』上・下 (日本評論社、2012年)。
- 5) これは地理歴史科学習指導要領の「(2) 世界の一体化と日本」の中の「エ アジア諸国の変貌と日本」と「(3) 地球社会と日本」の中の「イ 世界戦争と平和」に該当する。
- 6) この間の事情については、岩下哲典『江戸の海外情報ネットワーク』(吉川弘文館、2006年)などに詳しい。
- 7) 註1)に同じ。
- 8) この他、江戸時代における日本の動向が海外に影響した例として、山川3の紹介するベトナムの生糸関連産業の発展と衰退なども注目すべき内容であろう (山川3 pp.68-69「世界と日本 3 16・17世紀-大航海時代と日本」)。また、19世紀後半以降の動向については、山川3の「世界史へのいざない② 日本列島のなかの世界史」において「鉄道路線を世界史的に考える」の見出しで、八王子、埼玉県・群馬県をつないでいるJR横浜線や八高線のルートを取り上げ、近代の世界資本主義に組み込まれていった日本と世界のつながりを「鉄道」を題材に考えさせる内容となっている (山川3 p.9)。